



# 情绪的系谱

九鬼周造哲学中的情绪论研究

石莹◎著

非外借

南開大學 出版社

# 情绪的系谱

——九鬼周造哲学中的情绪论研究

石莹 著

南开大学出版社

## 图书在版编目(CIP)数据

情绪的系谱：九鬼周造哲学中的情绪论研究：日文/  
石莹著. —天津：南开大学出版社，2022.10

ISBN 978-7-310-06301-7

I. ①情… II. ①石… III. ①哲学思想—研究—日本—现代—日文 IV. ①B313.5

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2022)第 185689 号

## 版权所有 侵权必究

情绪的系谱——九鬼周造哲学中的情绪论研究

QINGXU DE XIPU——JIUGUIZHOUZAO

ZHUXUE ZHONG DE QINGXULUN YANJIU

---

南开大学出版社出版发行

出版人：陈敬

地址：天津市南开区卫津路 94 号 邮政编码：300071

营销部电话：(022)23508339 营销部传真：(022)23508542

<https://nkup.nankai.edu.cn>

---

河北文曲印刷有限公司印刷 全国各地新华书店经销

2022 年 10 月第 1 版 2022 年 10 月第 1 次印刷

230×155 毫米 16 开本 11.5 印张 2 插页 158 千字

定价：58.00 元

---

如遇图书印装质量问题，请与本社营销部联系调换，电话：(022)23508339

本书由河南师范大学学术专著出版基金资助出版。日文原题为“九鬼周造の哲学における情緒論——その存在論的分析と形而上的意義について”。

## 前 言

九鬼周造（1888—1941）是日本近代思想史上重要的哲学家之一，曾于1921年至1929年在欧洲留学，留学期间师从李凯尔特、伯格森、海德格尔等近代欧洲哲学家，并将存在主义哲学带回日本，成为了日本早期存在主义哲学传播与发展的主要人物之一。其偶然性哲学、“粹”的研究更是中外学界乃至文化爱好者们所熟知的对象。迄今为止，中外学者已从偶然性哲学、存在主义哲学、情绪论、日本文化论、“粹”的研究、时间论、文学诗歌论等方面开展了深入严谨且丰富多样的探究与讨论。本书立足于前辈们坚实的研究基础之上，以情绪论为中心，从存在论的分析与形而上学的意义这两个维度，对散在于九鬼周造的欧洲哲学史、人与存在主义哲学、文艺论、日本文化论等论述中关于情绪的思考进行了整体性的梳理与探讨。

首先，本书考察了九鬼周造在欧洲哲学史中多种关于情绪论的译介与思考，分析了他对于近代精神科学倾向哲学的早期关注，阐明了欧洲哲学对九鬼周造早期思想中关于情绪的思考所产生的影响。同时，考察了九鬼周造在偶然性哲学以及日本文化论中植根于东方古典哲学的思考与论述，明确了九鬼周造情绪论在世界思想史中的位置。

其次，本书在考察了东西方哲学和现代心理学中与情绪相关的词汇及其定义的基础上，从存在论的角度，详细地分析了九鬼周造情绪论的哲学特征。其中包括九鬼周造对情绪的定义和分类，以及对于情绪与人的关系的理解。

最后，本书从形而上学的意义与情绪论的关系这个角度出发，梳理并分析了九鬼周造在其早期思想中所呈现出的对于信仰与知识相调和的思考，以及中期思想中所持有的关于爱与哲学的调和观，进而引申出九鬼周造晚年思想中所蕴含的理性与感性调和的特征。

笔者关于九鬼周造情绪论的考察，先后经历了漫长的硕博阶段的研究与写作，在多位恩师的悉心指导和前辈、家人、朋友的鼓励之下，最终成稿。但深感自身的学识与思考还远远不足，且愿在研究之路上继续潜心磨砺，敬请各位同仁与前辈批评指正。

石莹

2022年7月

# 目次

序章 問題の提起と先行研究について	1
1. 問題の提起：九鬼哲学における情緒論を 全体的に捉える試み	1
2. 今までの先行研究と本研究の位置について	4
第一章 九鬼周造の情緒論の位置づけ	7
第一節 ヨーロッパ哲学からの影響と摂取について	7
1. 近代以前のヨーロッパ哲学からの影響について	7
2. 近代フランス哲学における心理学からの 影響について	26
3. 近代以降のヨーロッパ哲学からの摂取について	31
第二節 東アジア思想における源流について	53
1. 「いき」論から見る日本文化の情的特質	53
2. 日本文化の情的特質の内容について	59
3. 「もののあはれ」論と「諦め」の思想	62
4. 「自然」の思想における老荘思想からの影響	66
第二章 九鬼周造の情緒論における哲学的特質	78
第一節 情緒の語義について	78
第二節 九鬼哲学における情緒の定義について	81
1. 九鬼哲学における「全人」と情緒との対応関係	87
2. 九鬼哲学における「存在」と情緒との対応関係	98
第三節 九鬼哲学における情緒の分類方法の 特徴について	130

<b>第三章 九鬼の情緒論における理性と感性との調和</b> .....	138
<b>第一節 九鬼哲学における情緒論の形而上的</b>	
<b>意義について</b> .....	139
1. 形而上的情緒としての「驚異」 .....	139
2. 感情を適応する仕方について .....	145
<b>第二節 信仰と知識との調和を重視する初期の九鬼哲学</b> ..	147
1. 中世哲学の根本問題としての信仰と知識の関係 ..	147
2. 教父哲学期における信仰と知識の関係 .....	149
3. スコラ哲学における信仰と知識の関係 .....	153
<b>第三節 哲学と愛との調和を重視する中期の九鬼哲学</b> ..	156
1. 哲学と愛との調和に対する九鬼の思索 .....	156
2. 九鬼の情緒論における理性と感性の調和 .....	159
<b>第四節 九鬼の情緒論における「諦観」の問題</b> .....	159
<b>第四章 結論</b> .....	165
<b>参考文献</b> .....	168

## 序章 問題の提起と先行研究について

### 1. 問題の提起：九鬼哲学における情緒論を全体的に捉える試み

九鬼周造（1888—1941）は1909年東京帝国大学文科大学哲学科に入り、哲学の勉強を始め、大学院まで進学した。その後、8年間にわたり（1921—1929）、ドイツとフランスに留学した。当時のヨーロッパはまだ第一次世界大戦後の泥沼から復興することができない時期である一方、近代哲学における「人間の生の非合理性」や「人間の実存」に目を向ける新たな思潮がそうした混乱の中から生れたと思われている。例えば、ベルクソンの「生の哲学」、フッサールの「現象学」、マックス・シェーラーの倫理学を中心とした「哲学的人間学」、ハイデガーの「解釈学的現象学」などはその時期を代表する新たな思潮である<sup>①</sup>。

九鬼はそうした時代背景の中で、ドイツにおいて新カント学派のリッケルト、さらにはハイデガー、また、フランスにおいてベルクソン、サルトルから当時の先端的な哲学を学んだ。特にベルクソンの「新唯心論」・「生の哲学」と、フッサールの「現象学」、ハイデガーの「現象学的存在論」と、マックス・シェーラーの「生の哲学」に深い関心を示している。彼はフランスにおける「実証的精神」に基づいた哲学の特殊部門として生まれた「心理学」と「社会学」にも注目していた。さらに、九鬼はヨーロッパ哲学の解釈学的現象学によって日本文化を分析することに力を注ぎ、ヨーロッパ哲学と綜

---

① 藤田正勝. 2016. 九鬼周造——理知と情熱のはざまに立つ〈ことば〉の哲学. 東京：講談社, 29.

合させながら独自の「偶然性」の哲学を構想した。東西思想を融合する思想家として、当時のヨーロッパの新たな思潮としての実存哲学を日本に輸入し、和辻哲郎とならんで日本における実存主義の第一世代とも評価されている。もとより、実存哲学においては、物事の普遍的で必然的な本質存在に対し、個別的で偶然的な現実存在を優位とみなすため、人間が現実的世界に直面する時に現出する情緒の問題も重要な課題として取り扱われている。それだけではなく、九鬼の研究は日本文芸などの感性的領域にも及び、文芸哲学者とも言われている。

そうした多様な側面をもつ九鬼の哲学の中で、本書は特にその情緒論・感情論を中心に考察しようとするものである。

感情に関わる問題は、学問の対象として、古代から東西の思想家によって幅広く検討されてきた。ヨーロッパ哲学では、古代ギリシア哲学におけるプラトンやアリストテレスの「感情を制御しその中庸化を計ることで徳を目指す」倫理的な感情論と、ストア派の「感情の根絶を希求し、この方向において徳の成立を考える」感情論から始まり<sup>①</sup>、中世キリスト教哲学におけるトマス・アクィナスの信仰と理性との調和を重視することに基づいた感情論を経由し、近代の人間学におけるヒュームの『人性論』やデカルトの『情念論』、スピノザの『エチカ』、知性に対する感情の重要性を強調するルソーの感情論に至り、さらには現代の現象学・生の哲学におけるキルケゴールやシェーラーの精神科学的傾向の感情論にまで発展してきた<sup>②</sup>。現在では、感情の問題は心理学や脳科学などの新しい方面において研究されるようになってきているが、しかし、哲学の分野において、感情の本質に対する根源的なアプローチはまだ充分ではないと思われる。

また、感情の研究方法については、ヨーロッパ哲学においては感

① 廣川洋一。2000。古代感情論——プラトンからストア派まで。東京：岩波書店，1-2。

② 久保陽一、河谷淳。2002。原典による哲学の歴史。東京：公論社，x-xx。

情そのものを「心理学的」に、あるいは「現象学的」に分析する方法が採られたのに対して、日本思想においては「歴史的な感情理論の吟味」を通して、「事象そのものの論理を見いだそう」とする方法が採られてきた。感情に関わる問題は単なる個人の問題ではなく、個人が属する文化の問題でもある。各文化に現れる感情の様相はそれぞれの文化的特殊性を示している。しかし、感情の本質に関しては、普遍的な様相も存在すると考えられる<sup>①</sup>。

先に述べたように、九鬼周造の情緒論は幅広く東西思想の影響を受けており、その議論は、彼のヨーロッパ哲学史の講義・人間実存論・偶然論・文芸論・日本文化論など多様な分野に散在している。以下、それらを簡単にリストアップしてみたい。

まず、全集<sup>②</sup>第6巻、第7巻『西洋近世哲学史稿』（上・下）においては、ヨーロッパ哲学の歴史が、ルネサンス期の哲学から始まり、その後はカントを境目として、カント以前・カント・カント以後の哲学とに分類されて論じられているが、その中で随所に感情の問題が登場する。それをみると、デカルトやスピノザの人間論から、ドイツの啓蒙哲学におけるまで、さらにカントの美学やシェーリングの神秘主義から、ヘーゲルの精神哲学まで、感情に関する記述はヨーロッパ哲学の歴史の中で一貫してみられる。

全集第8巻『現代フランス哲学講義』においては、19世紀のフランス哲学における「実証哲学」の特殊学問として確立された心理学における感情論についても詳しく述べられている。

全集第9巻『現代哲学・現代哲学の動向』においては、ヨーロッパの現代哲学が「自然科学的傾向の哲学」と「認識論的傾向の哲学」との二つの時期に分けて述べられているが、特に後者の時期における「精神科学的傾向の哲学」において感情論が重視されている。この「精神科学的傾向の哲学」は、「精神科学的形而上学」と「生の

① 梅原猛. 1972. 笑いの構造. 東京: 角川書店, 211.

② 「全集」は『九鬼周造全集』の略称である。

哲学」と「現象学と実存の哲学」との三つの方向に分かれるが、いずれにおいても感情論は重要な位置を占めている。

全集第3巻『人間と実存』という哲学論文集の序文においては、九鬼は実存の問題こそ最も重要な哲学的課題とした上で、中でも情緒が「自然的人間」の最も重要な問題であるとしている。特に、論文「驚きの情と偶然性」においては、九鬼は偶然的な存在に対する驚きの情を形而上的情緒として検討している。そして、論文「日本的性格」においては、日本文化を「情的文化」として詳しく論じている。そこでは、ヨーロッパ哲学を通して、日本的感情が分析されている。

全集第4巻『文芸論』においては、当時編纂された『新万葉集』に収録されている和歌を手掛かりとして、ヨーロッパ哲学における感情論も参照しながら、40種類余りの情緒が分析されている。

以上のように、九鬼周造における情緒論は、ヨーロッパ近代哲学における感情論から、フランス哲学における心理学、現代哲学における「精神科学的傾向の哲学」まで、あらゆる哲学の分野にまたがり、さらには日本文化の問題にまで及んでいる。

これらを概観すると、九鬼周造が近代日本における東西思想の邂逅の中で、東西両方の研究方法によって感情を追究した思想家であることが明らかとなる。彼は時代の先端に立ち、情緒の本質をヨーロッパ哲学と東アジア思想との両方から、全面的に追究した思想家と言えよう。そうした九鬼の感情論を考察することによって、東西思想を融合させた視点から感情論を全体的に捉え、感情そのものを世界的・歴史的視野から理解し、人間における感情の本質と今の時代における感情の意義を考える一助としたい。

## 2. 今までの先行研究と本研究の位置について

今までの九鬼周造に関する研究は偶然論、時間論、押韻論、日本文化論、文芸論など様々な角度から取り上げられてきた。中国においても、九鬼に関する研究は少ないながらも着実に進展してきた。

卞崇道、徐金鳳、徐英瑾、江渝らによって論文や著作が発表されている。卞崇道は「九鬼周造における『偶然』哲学」(2005)において、九鬼による解釈学の名著『「いき」の構造』と、九鬼の代表的な哲学的著作である『偶然性の問題』を通して、彼の文化論と偶然論を紹介した。徐金鳳は『九鬼周造における哲学思想の研究——自他関係を手掛かりとして』(2012)において、自他関係を中心に、「いき」の美意識と九鬼の偶然論について論じた。徐英瑾は「ウィトゲンシュタインの哲学視野から見る九鬼周造の美学——『いき』論を中心として」(2015)において、ウィトゲンシュタインとの比較を通して言語哲学の視点から『「いき」の構造』の特徴を指摘した。江渝は「九鬼周造における『いき』論の哲学構造について」(2014)において、九鬼の「いき」論を手掛かりとして、日本文化と西洋文化の融合の方式と、日本文化がどのように独立性を維持するかについて考察した。

日本における九鬼に関する研究は、坂部恵をはじめ、大東俊一、田中久文、藤田正勝、古川雄嗣らによって、偶然論や押韻論から時間論や運命論に至るまで広く行われてきた。しかし、九鬼の情緒論と直接に関わる研究は、田中久文と小浜善信によるものしかない。

田中久文は『九鬼周造——偶然と自然』(1992)に収められた論文『「あはれ」の倫理学』において、九鬼の論文「情緒の系図」と「日本的性格」をめぐって、「あはれ」の倫理学という視点から、「情」の自然性と、九鬼情緒論の自他関係の特徴について論じている。田中は「自然」の思想が晩年に重視されるようになったとして、「あはれ」という視点から、論文「情緒の系図」を分析した。そして、「自然」の思想は「いき」の哲学にみられる自他関係の緊張性を克服し、その融和を目指したものであり、そこには倫理性に関する考えを深める契機があると考えた。小浜善信は『九鬼周造の哲学——漂泊の魂』(2006)に収められた論文「神と世界——『驚きの情と偶然性』、『偶然化の論理』」において、まず、論文「情緒の系図」と、フランス留学中に書いた短歌をめぐって、九鬼が情緒をありの

ままた受け入れようとする心境を論じている。次に、論文「驚きの情と偶然性」をめぐって、驚きの情と偶然性の関係を説明している。いずれにせよ、二人とも情緒論を全体的に論じてはいない。

他には、藤田正勝は『九鬼周造——理知と情熱のはざまに立つ〈ことば〉の哲学』（2016）において、九鬼哲学の重要な問題を「いき」論・偶然論・時間論と、文芸論・文化論・自然観・文学などとの二つの部分に分けて、理知的認識と情熱に溢れる感性との二つの視点から論じ、九鬼が「明徹な知性の人」であるとともに「悩み、歓び、燃える『情の人』」でもあったという二面性を持っていることを指摘した。特に、九鬼の中にある「豊かな感性で生き生きとした現実に向かい迫ろうとする」部分と、「厳密な、そして抽象度の高い思弁的な思索に侵る」部分とが同時に存在していることを強調した。また、檜垣立哉は論文「九鬼とレヴィ＝ストロース：二つの構造論的感性論」（2017）において、九鬼の『「いき」の構造』、『偶然性の問題』、『情緒の系譜』などの論文に見られる一種の構造論的図式と、レヴィ＝ストロースの構造主義とを比較し、九鬼哲学における感性の構造について分析した。それは、文化的共通点における「邂逅的な偶然」と構造的意味における「根源的なロジック」との二つ方向において議論されている。

以上のように、九鬼哲学における情緒論については、さまざまに論じられてはきたが、その重要性にもかかわらず、その構造と内容はいまだ十分には解明がなされていないと言えよう。本論では、先行研究の現状を踏まえ、『九鬼周造全集』に散在している情緒に関するあらゆる論述を系統的に整理し、全体的に考察しようとした。

本書で引用した九鬼周造の著作は、『九鬼周造全集』全11巻と別巻（天野貞祐・澤瀉久敬・佐藤明雄編、岩波書店、1980—1982）である。引用文中の「、」を「,」、「.」を「。」に改め、内容、言葉や文字などをそのままに留めた。

## 第一章 九鬼周造の情緒論の位置づけ

序論の問題提起で述べたように、九鬼周造の情緒論には、主として、ヨーロッパ哲学における感情の問題に関する論説からの影響と摂取、特に当時世界大戦後のヨーロッパで流行っている実存哲学との関連で感情を分析した部分、ヨーロッパ哲学における感情論を通して分析された日本文化論・文芸論における日本的感情の様相を論じた部分、九鬼哲学の最も重要な問題としての偶然論における「驚異」という感情を論じた部分の三つの部分が見られる。

そうした情緒論は、九鬼哲学における「東西の邂逅」という特徴に一貫しているように、東西における様々な思想を摂取しながらも、人間における感情の本質を歴史的に・哲学的に、また文化的に、さらには科学的に理解しようとした感情論であると言えよう。本章は、九鬼情緒論における様々な東西思想からの摂取と影響を分析し、世界思想史における九鬼情緒論の位置づけを検討する。

### 第一節 ヨーロッパ哲学からの 影響と摂取について

#### 1. 近代以前のヨーロッパ哲学からの影響について

九鬼周造の『西洋近世哲学史稿』（全集6・7）では、ヨーロッパ哲学を、近世以前の過渡時代であるルネサンス期の哲学と、大陸の合理論・イギリスの経験論・啓蒙期の哲学を含むカント以前の哲学と、カント及びドイツの観念論を中心としたカント以降の哲学とい

う三つの時期に分けて論じられている。

九鬼によれば、近世哲学は中世神学の伝統から離れ、各哲学者の独創的・自律的な個人的思索が主役となった。内容においても、自然・世界・人間・社会・歴史という現実的なものが中心となって、世界観も超越的な世界から現実的な世界に移っている。また、近世哲学は中世哲学即ちギリシア哲学から発展したが、自由意志の問題が検討されるようになり、心理学・社会学などの特殊科学も哲学から離れて独立した。中世哲学においては神に対する態度が問題であったのに対して、近世哲学においては自然科学に対する態度が大きい問題になってきていたという。

後述するように、九鬼は中世哲学における信仰と知識との関係の問題に対しては、両者の調和を重視する立場を徹底している。その態度は単なる中庸的ということではなく、人間の感情の本質を統一的に理解しようとする姿勢からくるものである。

### ① ルネサンス期の哲学からの影響

九鬼は、近世以前の過渡時代におけるルネサンス期の哲学を「再生的文芸復興」（古代の哲学の再生）と「生産的文芸復興」（新しい哲学の生産）とに分けている。「再生的文芸復興」には、現実的な世界を重視する思想が主役となるとともに、教会中心主義に対して、人間性が重視され、人間の個性を尊重すべき人文主義が復興した。しかし、九鬼は「生産的文芸復興」の方がルネサンス期の哲学の中で重要な意義を持っていると考え、その思索の中から近世の世界観が形成されていたと考えている。

まず、ドイツの神秘説において、人間とその精神の本質の概念に関する思索が深められたと考える。その代表的な哲学者はヴァレンティン・ヴァイゲルである。九鬼は彼の論説について以下のように述べている。

Weigel は神秘論者の立場から認識の形而上學を立てた…神を精神的に認識することが認識の原型である…一體、自己の精神は

神の似姿であつて我々はそれを知らないでもつねに自分の中に神の全體の豊富さを蔵してゐるものである…認識とは精神が自分自身の内でまた自分自身から自己展開することである。精神は自己の深い存在として眞理全體と存在の充實とを自己の中に有つてゐる…人間が自己を會得したならばまた萬有をも理解したのである。<sup>①</sup>

つまり、「生産的文芸復興」の思想においては、哲学者の神に対する探究は、その実人間自身の探究だったのである。物事を認識する活動には、神の開示ではなく、人間の精神自体の働きが重要な役割を果たしていることに気づき、精神・感覚・知覚などの概念をめぐる分析も登場している。

事物を認識することは事物の内的本質を體得することであつて、事物の結果いはば事物の文字に外的に觸れることだけであるのでない。それ故に事物の認識はその形而上の本質に従つてまた單に精神の内的自己展開（Selbstentfaltung）と自己貫徹（Selbstdurchdringung）でなければならない…認識は精神の純粹な能動性（Aktivität）である。感覺的知覺にあつてさへも、認識を與へるものは、我々の中にあるところの把握力である。感覺は對象の中にあるのではなくて、感覺は對象といふ外物によつて單に呼びさまされるのである…外部からの作用によつて我々は實際に單にこの内的所有の自己展開へまで刺激されるだけである。<sup>②</sup>

次に、九鬼はヴァイゲルと異なるヤーコブ・ベーメの思想にも注目している。九鬼によれば、ベーメは形而上学の中核に突き進む人でありながら、特にカント以降のシェリング、バーデル、ショーペンハウエルなどの思索の先駆者でもあるという。ベーメの思想は悪の起源の問題を中心としている。ベーメによれば、神の啓示の基礎

① 九鬼周造. 1981. 九鬼周造全集 6. 東京：岩波書店, 32-33.

② 九鬼周造. 1981. 九鬼周造全集 6. 東京：岩波書店, 33-34.